
悲しい。

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しい。

【Nコード】

N 4 2 3 4 B

【作者名】

林檎

【あらすじ】

登場人物の設定とか関係は読む方々、それぞれに想像してください。

貴方が口の中に押し込めて、しまい込むような笑い方をするから、なんだか発散するのを嫌がるようなその笑顔に私は少し、悲しくなつた。

今吸っている煙草すら、終わればなんの意味も持たないとふいに気付かされて、だから私はそれを勢いよく灰皿に押し付けた。
オレンジの火花が散った。

貴方が好きだと言った唄が、命だとか地球だとか哀色なことばかり連呼したもんだから、それがこの世にすりつく貴方の亡霊のような気がして私は、苦しくて苦しくて、世に潜む全ての愚かな人間を恨まずにはいられなかった。

ああ。夜なのに何故か向こうの方に空が、雲が光っていて、私は期待せずにはいられない。

昔々読んだ絵本の物語みたいに、そこから貴方が降りて来て、嫌がる私を無理矢理にでも昇らせてくれはしないか。

心の中に雷鳴が轟いて、そこには私しかなくて、何ひとつ、何ひとつ私を哀れんではくれず、もたれかかる壁すら存在しない。

死ぬほど苦しくたって人は死にはしない。簡単には死ねない。

貴方はきつと私をさげすむだろう。こんな私を。だけど迎えにも来てくれない貴方は、それすらもうしてくれないのか。

貴方が死んでから、私はパニックを起こすようになった。息が苦しく、心臓は馬鹿になり、指先は震える。ろれつが回らず、胸部は凍りつくように冷たくなる。

それはいつ来るか分からない。

私にすら分からないそんなそれを、誰かが理解してくれるはずもない。

指先が冷たくなるたびに、貴方が抱きしめてくれた、その背中の暖かみすら忘れていく。

愚かな私。

唯一の暖かみすら、私を見捨てたのでしょ。

地球は丸いのでは無かったか。

何故ここは崖なのだ。何故、何故崖の底に待ち受けるそこには、この世の果てがあるのだろ。

きっと神は私のような人間のために岸壁を作ったのだろ。

だけど私は運命に逆らう。悪あがきするように。

貴方の最期が、私を神の意思から逆らわせるのだ。

だからバーゲンセールのデパートに居る。こんな気持ちで歩いている人が、この場所に誰か居るだろ。そう考えたら私は少しだけ寂しい。

貴方の笑顔は何故、あんなに苦しそうだったのですか。

私がこうなることを予期して居たのですか。

それでも恨みはしない。

私は貴方を恨みはしない。

貴方の無念、貴方の愛しさ、そして悲しみ。それを誰より私は知っているから。

だから私は今日も一人、部屋にうずくまり、襲いかかるパニックの発作にじつと身を潜めて耐えている。

貴方が残したあの笑顔に、苦しみを感じながら薄れゆく意識の中で私は何度か呟いた。

「神様」

「神様」

「神様」

貴方の魂はきつと何処にもない。天国にも地獄にも。そもそも魂なんてものは存在しない。

そんな風に考えるたびに寂しくて、パニックは私を襲うし、悲しみはとめどなく押し寄せる。

だけど涙が出ないのは、枯れ果てたからなのか。

「俺が死んだら、多分俺は普通に墓の下に埋められて、盆とかに親戚に参られて、そんでその後親戚は何事も無かったみたいに酒のんで宴会するんだろうな。俺は一晚中線香臭い煙にむせながら過ごさなくちゃならないっていうのに」

病室のベッドに横たわり、この世にしがみつくような弱々しい命を、それでも小さな灯みたいに光らせながら彼はいつか言った。

「じゃあ、あたしが線香消しに行ったげる。水をぶっかけてやるよ。代わりにあんたの好きなムスクのお香を炊いて、墓の前に座って一晚中ビール飲んでやる。あんたは何が飲みたい？」

「…芋焼酎」

そう言った彼は、元気だった頃には見せた事のない、押し込めるようなあの笑顔で笑った。今想うと、多分彼は泣きそうだったんだと思う。

泣いたら良かったのに。

パニックがおさまり、私は夜ごはんを食べる。さして食べたくもないのだが、薬を飲む前に何か胃に入れなくてはならない。食べるのは苦痛だ。

だけど人間は生きるために食べなくちゃならない。だから死ぬのは簡単じゃない。

貴方は死ぬ時、大変だったんだろうな。

多分、すごく大変だったんだろうな。

「死にたくない！！！！！！！！」

そう言っただけ私の腕にしがみついた、最期の貴方。痩せて真っ青になった顔で。

だから私は死ねない。

死ぬことはできない。

私の中にある、悲しい私と貴方の亡霊。

多分、私がいつか死ぬまですつとこのまま。

悲 悲 悲
し し し
い い い

（後書き）

感想などあればよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4234b/>

悲しい。

2010年12月21日16時09分発行